

## 草の根の通信使に

桜井 政男<sup>1</sup>

日本と韓国朝鮮とははるかな古代から交流があったが、それが制度として歴史に登場するのは、室町幕府の朝鮮通信使だろうか。朝鮮国王と対等の礼をとる交隣関係を維持していたこの歴史から、私たちは多くのことを学ぶことができる。朝鮮通信使という言葉を通して、私はいま改めて両国の友好の歴史を振り返ってみたい気持ちに駆られている。信州大学の学生時代に、韓国からきた高校生の家庭教師をしていたり、留学生との交流を深めるサークルに所属していた私は、一度韓国の土地を踏んでみたいと思っていた。今回の日本と韓国との国際文化交流に参加してそれが実現できたのだが、かの地は予想していた通り、朝の光の鮮やかな空の青い美しい土地であった。

カトリック大学の先生方にソウル市内を案内して頂きながら、光化門や昌徳宮などの美しさとともに心に浮かんだのは、これを破壊した悲しい歴史であった。

日本は古来より韓国朝鮮に対して技術文化の先進国として尊敬の念を抱いてきたが、もう一方で大きな傷跡を残し信頼を失墜させた歴史もあった。その負の歴史とは豊臣秀吉の侵略であり、さらに明治政府の日韓併合である。

私は韓国に滞在中何度か、作家司馬遼太郎の小説『故郷忘じがたく候』<sup>2</sup>を思い浮かべた。この小説は、秀吉が15万8千人もの大軍をもって朝鮮を侵略したころが舞台で、秀吉の死とともに撤兵を余儀なくされたおり日本に拉致されてきた被虜人たちの物語である。薩摩の島津家の陶工として370年を経た今日まで、母国の伝統を守り、片時も故郷を忘れなかった人々の望郷の思いが切々と伝わってくる。小説の主人公は代々薩摩焼きの家柄を継ぐ第14代沈寿官氏である。ソウル大学に招かれた沈寿官氏は、若い人のだれもが口をそろえて36年間の日本の圧制について語るのを聞いて、「あなた方が36年間をいうなら」「私は三百七十年をいわねばならない」と言葉を結んだ。そのあと学生の間から大合唱がおこった、この小説には書かれている。悠久な歴史の流れに驚嘆しながら、私はいままで思っ

<sup>1</sup> 信州大学人文学部英米文学科1回生。信州大学人文学部同窓会副会長。

<sup>2</sup> 昭和43年10月1日 発行 文芸春秋

てみる余裕がなかった歴史の見方に思い至った。まさにこれはカトリック大学との交流から得ることができた発見である。

破壊された友好関係を誰が修復するか、という視点で歴史をみること。家康という人をこの国交回復の事業を進めた統治者としてみること。明治維新以後の新政府の政略と比較してみること。これは意味あることだと思われる。日本が欧米から押し付けられた政略をそのまま、いやそれ以上の苛烈さをもって韓国を併合してしまった明治政府。そのような圧制の中にも、日本人としての良心を表明した人々を探ること。例えば石川啄木は、「地図の上、朝鮮国にくろぐろと、墨をぬりつつ秋風を聴く」、という歌を詠んで抵抗の心を著わした。このようなことを私たちはもっと知るべきだろう。

日本の敗戦以後、日本は破壊した韓国朝鮮との負の歴史を修復してきたか、と問うこと。そして今日の韓国を知って韓国の人々との友好を築くこと。これは今の私たちの役目ではないだろうか。今回の日本と韓国との文化交流の体験を通して、私は草の根の通信使になりたいと願うようになった。

改めて、かつて家康が誠意をもって通信使を復活させた歴史や文化の交流から学びたいと思うのである。江戸時代には通信使の派遣回数は12回に及び、その中には多くの学者、医師、画家、書道家、陶工、音楽家などがいたという。この使節団が日本に与えた文化や産業の影響は量りしれず、私たちは意識しないところでこの恩恵に与っているのだろう。

はるかな先人たちの業績に思いを馳せ、今の自分に何ができるかを探りながら、静かに、確かな一歩を踏み出したい。

#### 【参考文献】

中村新太郎著『日本と朝鮮の二千年』（上下）（東邦出版社）

『歴史読本臨時増刊』（第30巻第11号）「特集 日本と韓国・朝鮮の2000年」  
（新人物往来社）